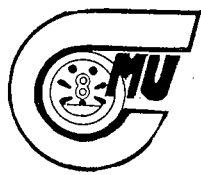


千葉労働動向



労働者は今こそ立ちあがり

労組交流センターが五月合宿開催

全国交流センターの第三回(東日本ブロック)合宿は、五月五、六日の両日千葉県九十九里センターにおいて、東日本の仲間一七〇名が結集し、大成功をおさめた。

合宿第一日目は、初めに代表運営委員である佐藤芳夫氏の主催者挨拶につづいて、山川暁夫氏より「湾岸戦争、その後の情勢」と題した講演を受けた。

山川氏は、①湾岸戦争は米の仕組んだ侵略戦争であること。②米帝の「勝利」によって、帝国主義の暴力を賛美する声が上がっているが、歴史上かつてない大破壊戦争・大虐殺であること。

また、日帝は①戦費の二十%以上を負担し、世界で最も支出した戦争の張本人である。②天皇のアジア訪問、掃海艇の東派兵など戦争国家へとつきすすんでいる。

こうした事態を明らかにし、「今や、必要なのは『平和を守れ』『民主主義を守れ』などの『守れ』だけではだめだ。労働者人民の闘いで、新たな政治をつくりあげることだ」と結んだ。

続いて全国交流センター運営委員の三角忠氏より「スターリン主義体制崩壊の根拠とわれわれの立場」と題して、報告を受けた。

つぎに全通の郵政マル生闘争被免職者、国労闘争団の二名の仲間、統一地方選(東京杉並区議選)立候補者の新城せつ子さんから、それぞれ闘争報告と決意をうけた。全参加者は勝利するまで支援・共闘することを新たに誓った。

夕食後には、四班に別れての交流会が開かれ、和気あいあいの中、地域・各組合の闘いの報告が次々と出された。

合宿第二日目は、鎌倉孝夫氏の講演「政治経済情勢と労働運動の課題」が始まった。

鎌倉氏は、①「社会主義」の激動は、スターリンの過ちに原因があること。すなわち労働者階級(多数者)による支配であるべき社会主義を、「共産党でなければ理解できない」とすることで、一党独裁・官僚主義へとねじ曲げ、その結果大衆の主人公としての自覚・行動が欠如した。そしてペレストロイカの危機、「対決する社会主義」の終えんと、まさにスターリン主義は崩壊の危機を迎えている。

②一方アメリカも、経済的危機をはじめ、麻薬の蔓延、ホームレス三〇〇万人、高校中退者の激増と、経済・社会は不化は激しく、世界一の借金国アメリカの赤字はなくならない。

③日本においても、その実相は、バブル経済・ギャンブル経済によって働くことの意味喪失や、劣悪な労働条件、様々な格差・差別、環境破壊の経済であること、などを明らかにした。

最後に労働運動の課題として、①根拠・目標をもった対決、②量から質、依存から自主・自立へ、③共同・連帯関係の確立、であると訴えた。

次に電機産別労働者からの報告ののち、合宿のまとめとして、代表運営委員でもある中野委員長が、まとめと方針を提起した。はじめに、今合宿は初めて東西ブロックに別れて開催したが、参加者も多く成功したといえる。そのうえで、①清算・共闘し勝利しよう。②本格的な反戦闘争を全力でつくりあげよう。そして、この二大方針のもと、全国交流センターは今こそ労働者階級に責任をもつ組織として闘いをつくりあげよう、と訴えた。

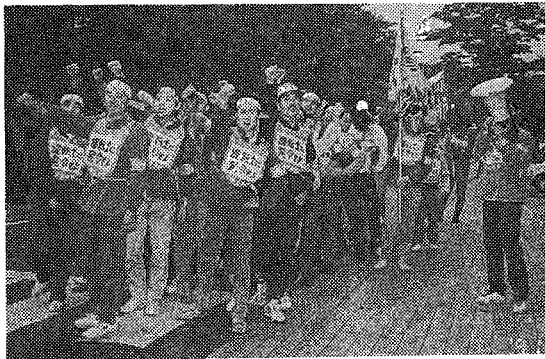
動労水戸が抗議集会

水戸支社 不当な本科開設を強行

五月八日、この日動労水戸に結集する若き労働者は怒りにもえていた。JR東日本水戸支社がJR総連と結託して、動労水戸の予科生だけを排除して、動力車乗務員本科の開設を強行したから

この不当極まる当局の対応に、動労水戸、動労千葉、さらに部落解放同盟茨城県連、「障害者」解放を闘う青い芝の会、茨城労組交流センターの労働者・市民が急を聞いて駆け付けた。水戸支社へ腹の底からの怒りのデモ・シュプレヒコールをたたきつけた。その後教育会館にて「運転士差別発令反対」総決起集会を圧倒的にかちとった。

五六・五七予科生の代表は、各々「同期の乗務員と賃金が六万円も違う。しかし当局に負けずに闘ってきた」「友のことを思い、友のために闘う。水戸の主流派として差別・選別に負けない」と、烈然たる決意を述べた。



組合差別を弾劾する

分割・民営化こそが重大事故の原因

五月十四日発生した信楽高原鉄道での、列車正面衝突事故は、死者四十二名、重軽傷者四百名をこえる大惨事となった。そしてその原因が、信号の故障とムチャな列車運行にあると報道されている。だが本当にそれだけなのか。そもそもJR西日本から第三セクターとなった信楽高原鉄道に、なぜJRの運転士が乗り入れているのか。一つの線路に複数の会社の運転士が乗務することは、この間の貨物列車の事故でもわかるように、危険なことなのだ。しかも信号は故障、列車は遅延、このような異常時に正確に会社間で連絡をとりあうなど不可能なのだ。その意味で、この事故

は分割・民営化の強行ゆえに起きたものといえる。全国一本の鉄道を寸断したことが、こうした事故の真の原因なのだ。JR西日本は、社内第三セクターとも言うべき「鉄道部」の導入を強行している。ますます事故の危険は高まっている。いまこそ本格的に運動保安闘争にたちあがろう。